

狭心症診断カテ・冠動脈インターベンション症例  
に対する、心臓リハビリテーション導入の試み  
～運動習慣獲得にむけた継続教育支援にむけて～

小野美奈子 武井紀恵 石井典子  
白石奈々 大野加代子 佐治真育  
諸富伸夫 角口亜希子 三浦稚郁子  
長山雅俊 伊東春樹

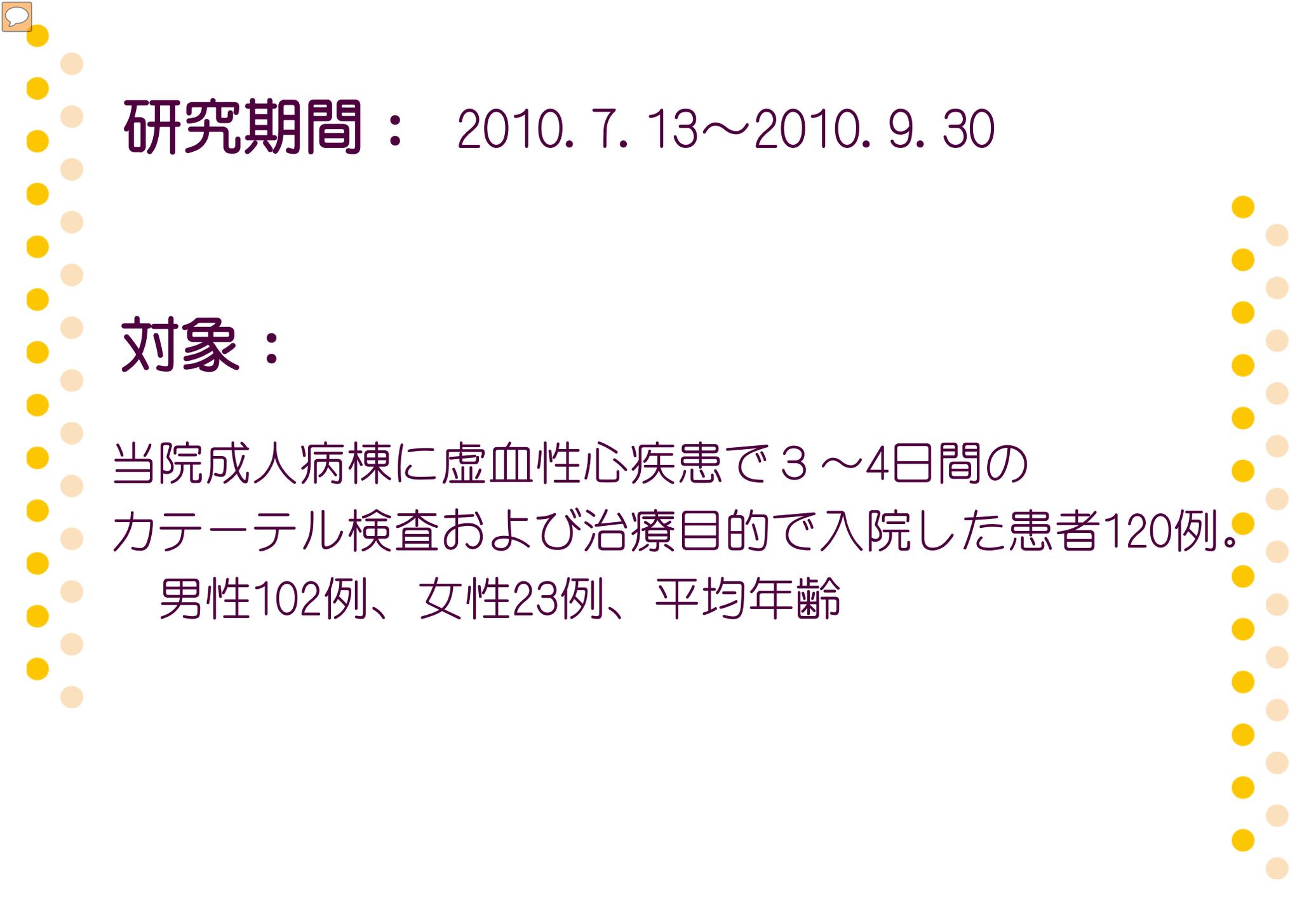
# 背景

冠動脈疾患に対する運動療法を中心とした心臓リハの効果

- \* 日常生活における症状の改善
- \* 冠動脈事故発生率の減少
- \* 生命予後の改善
- \* 脂質代謝異常の改善

# 目的

虚血性心疾患でカテーテル入院をした患者にたいし、パンフレットを用い、心臓リハビリテーションの重要性を啓発し、有用性と課題を明らかにする。



研究期間： 2010. 7. 13～2010. 9. 30

対象：

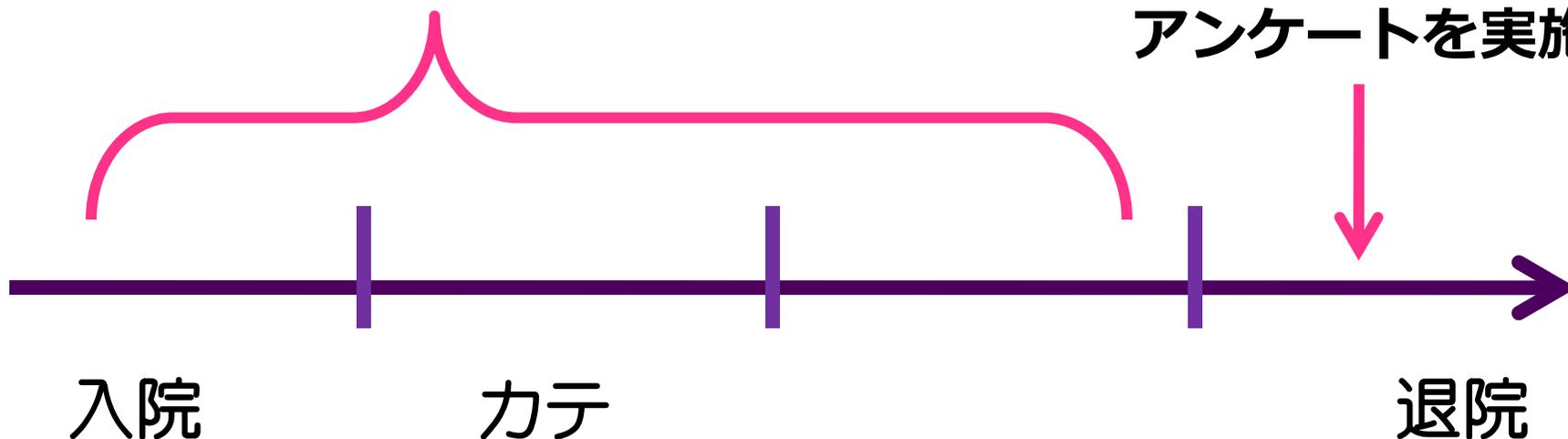
当院成人病棟に虚血性心疾患で3～4日間の  
カテーテル検査および治療目的で入院した患者120例。  
男性102例、女性23例、平均年齢

# 方法

患者が入院してから退院前日までの間に、看護師が心臓リハビリテーションの重要性についてパンフレットを用いた啓発を実施し、退院前にアンケートを行う。

**パンフレットを用いた教育を実施**

**アンケートを実施**



## 指導方法

- ・ 指導は、入院から退院前日までの間に看護師が行う。原則として、看護師がパンフレットを用いて指導を行うが、状況によって看護師による指導が行えない場合は、パンフレットのみを渡すこととした。

## アンケート

- ・ アンケートは、看護師が指導を行った際およびパンフレットを渡した際に配布し、退院時に回収した。

## 指導内容（パンフレット）

- ・ 心臓リハビリの重要性と効果、具体的方法についてについて、わかりやすいビジュアルと説明で作成されたパンフレットを用いて説明を行う。

\* 今回は、エビデンスにもとづく情報と心臓リハビリの具体的方法が、わかりやすく作成されている『経皮的冠動脈インターベンションと心臓リハビリテーション』編者ジャパンハートクラブ編を使用した。

# 調査内容

1. パンフレット指導後の心リハ実施状況
2. パンフレット指導前の心リハに対する知識
3. 心リハに対する知識と過去の入院回数との関係
4. パンフレット指導後の心リハに対する重要性の認識

## 分析方法

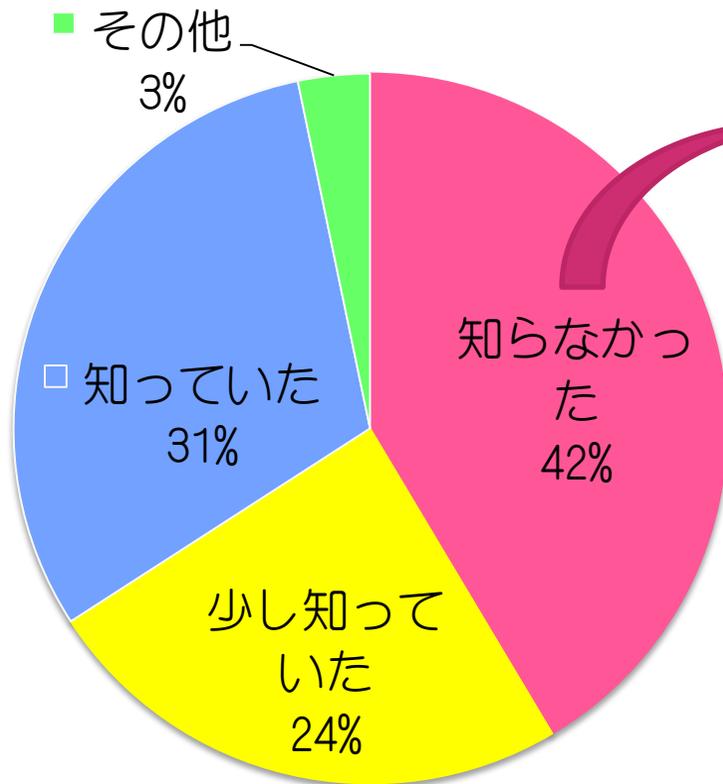
心リハに関する情報の把握「知らない」「知っている」  
心リハの必要性の認識「あり」「なし」、行動ステージ「関心期」「準備期」、  
行動することを困難と「思うか」「思わないか」を従属変数とし、  
要因をを独立変数とし、 $\chi^2$ 二乗検定で二群間の比較を行った。  
検定ソフトはSPSSVer.11を使用した。

# 結果1：パンフレット指導後の心リハ実施状況

対象125人中、教育後の心リハの行動変容は

外来通院リハ	12人、10%
CPXと運動処方実施	10人、8.3%
CPXと運動処方と栄養指導	12人、10%
栄養指導実施	29人、24.2%
入院中の指導のみ	57人、47.5%

## 結果 2 : 指導前の心臓リハビリの知識

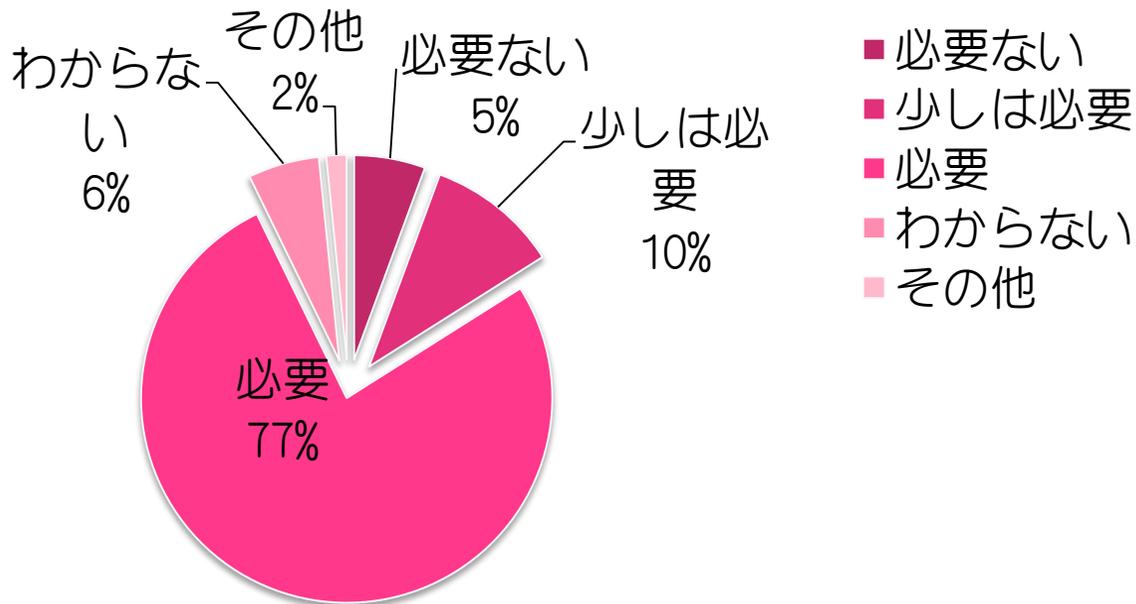


- 知らなくても良かった 8%
- もっと早く知りたかった 8%
- 今回知れて良かった 82%

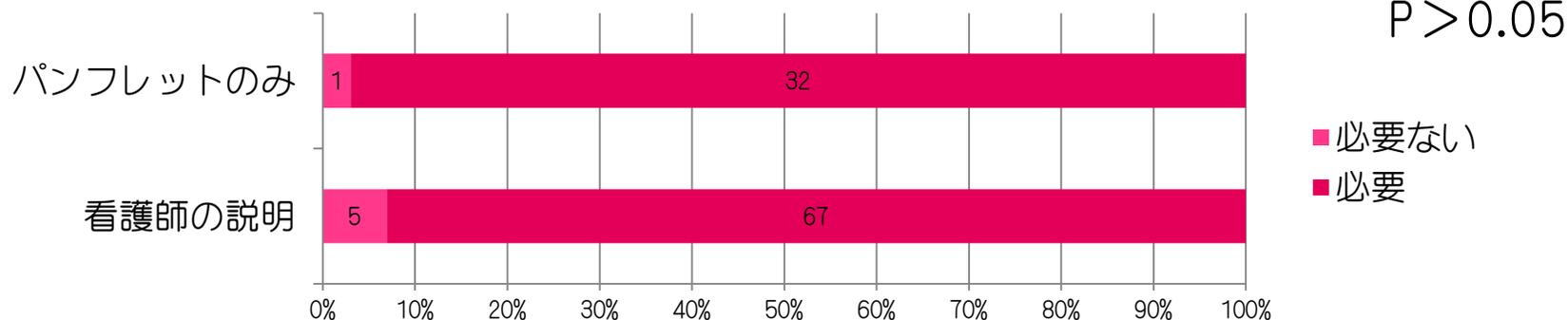
# アンケート結果 4

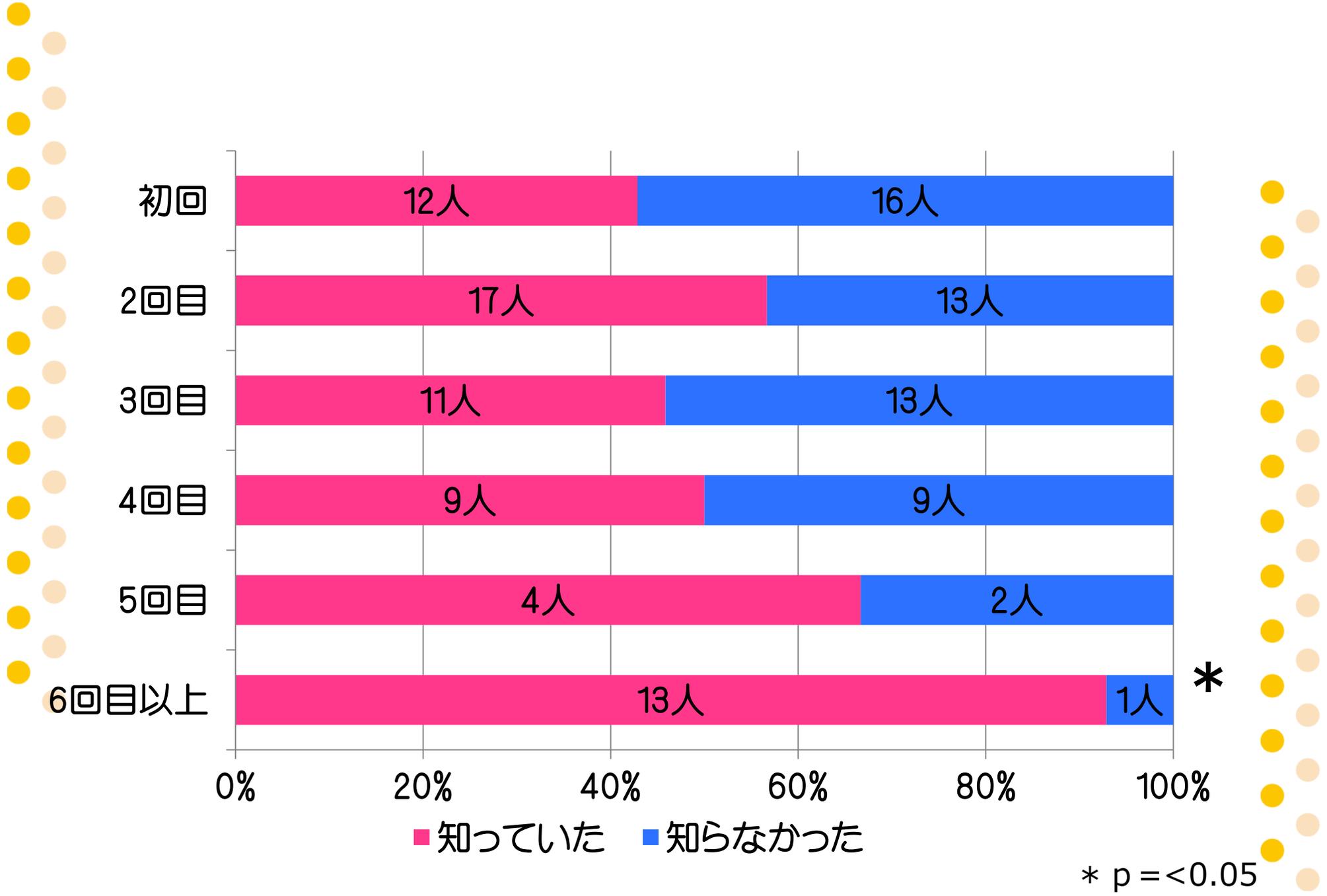
## パンフレット指導後の心リハに対する重要性の認識

### ①心リハ・運動療法への認識



### ②説明方法の違いとの関係





# まとめ

1. 虚血性心疾患で入院した患者に対し、入院中にパンフレットを用いて心リハの重要性について患者教育を行った。
2. パンフレットを用いた患者教育後の患者の行動変容は、心リハに通院が12人、CPXと運動処方方が10人、CPXと運動処方方と栄養指導が12人、栄養指導が29人であった。
3. 患者の教育前の心リハに関する知識は、知らなかったが42%、少し知っていたが24%、知っていたが31%であった。心リハの知識と入院回数との関係では、入院回数6回目以上で知っていたに優位な差を認めしたが、それ以外では認めなかった。
3. 心リハ・運動療法の必要性認識は、必要が77%であった。看護師の説明方法の違いによる有意差は認めなかった。

## 結語

- ・ 心リハのエビデンスが説明され、ビジュアル的にも見やすいパンフレットを用いて行った患者教育は、短い入院期間においても心リハの重要性を啓発することに有効である。
- ・ 今後は、看護師の説明力スキルアップ、短い診療時間内での効果的情報提供と行動獲得にむけた継続支援を実施していくことが看護の課題である。